

現代都市空間と生きづらさ

——精神医学・生物学・社会科学から眺めた都市と人間



—— 都市経済学研究会 @京都大学

2024年1月31日

熊代亨(精神科医、作家)

※開示すべきCOIはありません

演者紹介：熊代亨



- ・ 1975年生、信州大学医学部医学科卒業。信州大学精神医学教室に入局。
- ・ 精神科専門医、精神保健指定医。
- ・ スタンダードな精神科病院で、スタンダードな精神医療をやっています。
- ・ 精神医療の外側にも関心が捨てきれなかった結果、「診察室の外側の風景」と「診察室の内側」の風景を見比べるのがライフワークになりました。
- ・ 近著：『人間はどこまで家畜か』『健康的で清潔で、道徳的な秩序ある社会の不自由さについて』など。

本日のお話の眼目

- ・私の関心領域や活動に沿って、「都市という空間」が人間に与える影響について、メンタルヘルスの問題や少子化を意識しながら紹介します。とりわけ、
- ・人間はホモ・サピエンスという哺乳類の一種であることを踏まえたうえで、
- ・精神医学、(進化)生物学、社会科学といった角度から考えていきます。

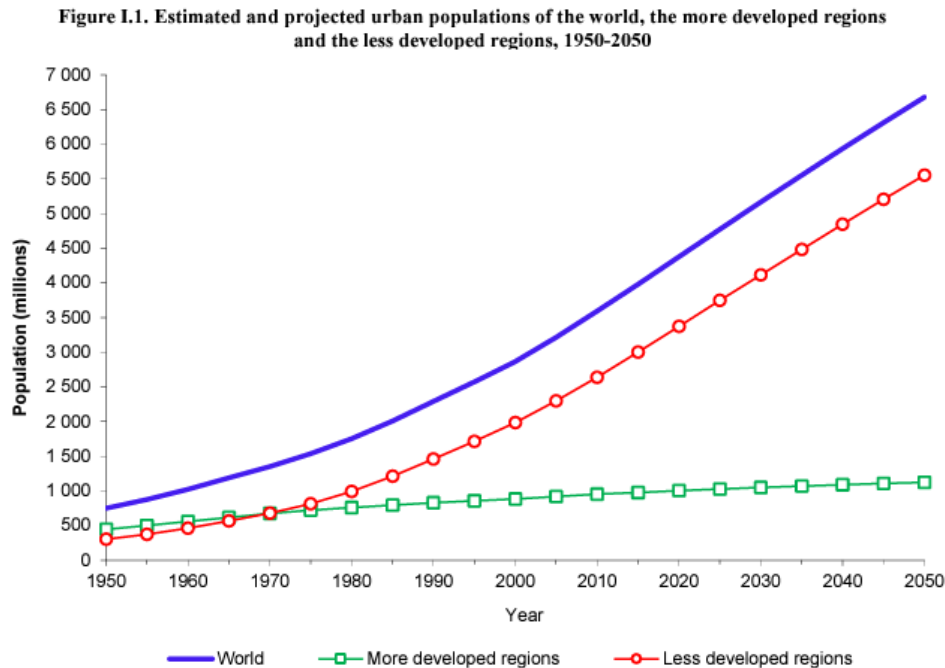


本日の進行

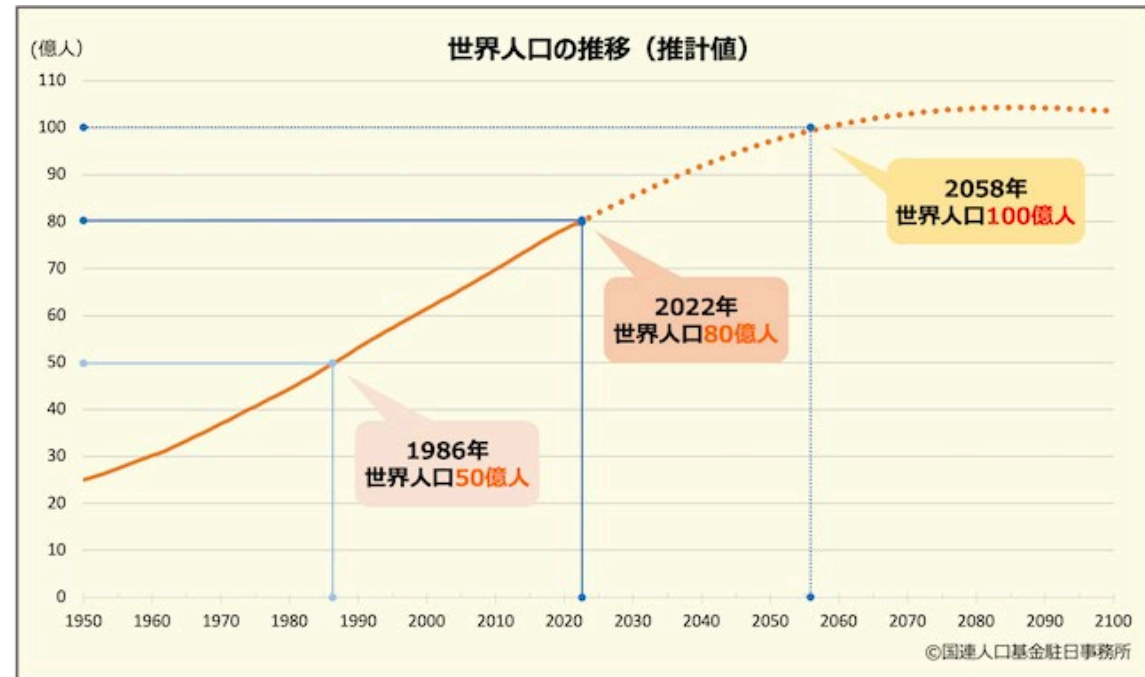
1. 都市化と少子化、東アジアについて
2. 都市の来歴とその課題 古代メソポタミアから近現代まで
3. 都市の発展は精神医学とどう歩調を合わせてきたか
4. 生物学的にみて、都市は人間にどんな影響を与え、精神疾患と関連するのか
5. 社会科学の視点でみた都市、そこで内面化される思想、その影響

都市人口についての現状

- 近年、人口集積は加速している。全世界の都市人口割合は1950年代には30%未満、現在は**50%**を突破(World Urbanization Population Prospects 2018)
- と同時に、東アジアでは首都圏の人口比率が上昇し続けている。
- 大都市を中心に出生率が低下。その傾向は東アジアで顕著。



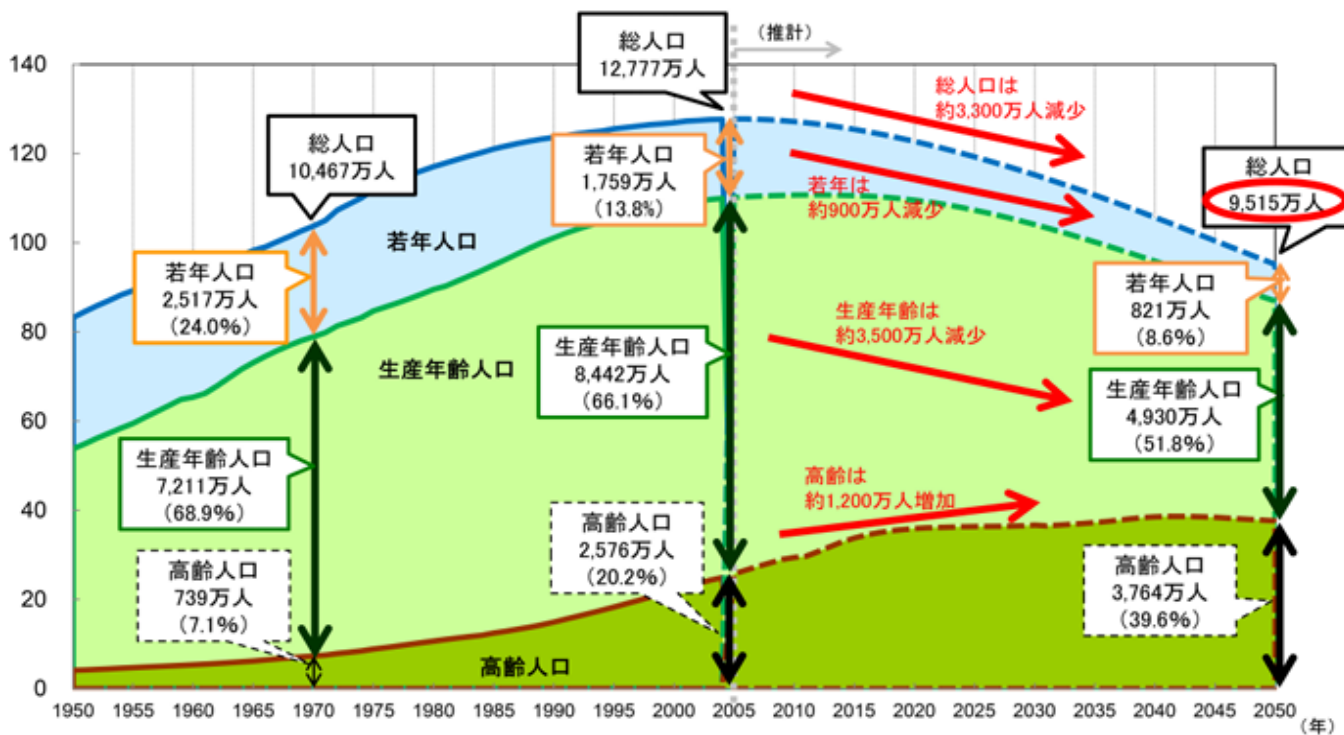
出典：world urbanization prospects, the 2018 revision.



出典：国連人口基金 駐日事務所

日本の状況

- ・ 2023年の日本の合計特殊出生率は1.2まで低下。
- ・ 総人口は2050年には約9500万人、生産年齢人口は約3500万人まで低下。現在、人が居住している地域の約2割が無居住化。（総務省『我が国における総人口の長期的推移』）
- ・ 人口減少と同時に、中核都市、特に東京首都圏の人口シェア率が上昇。

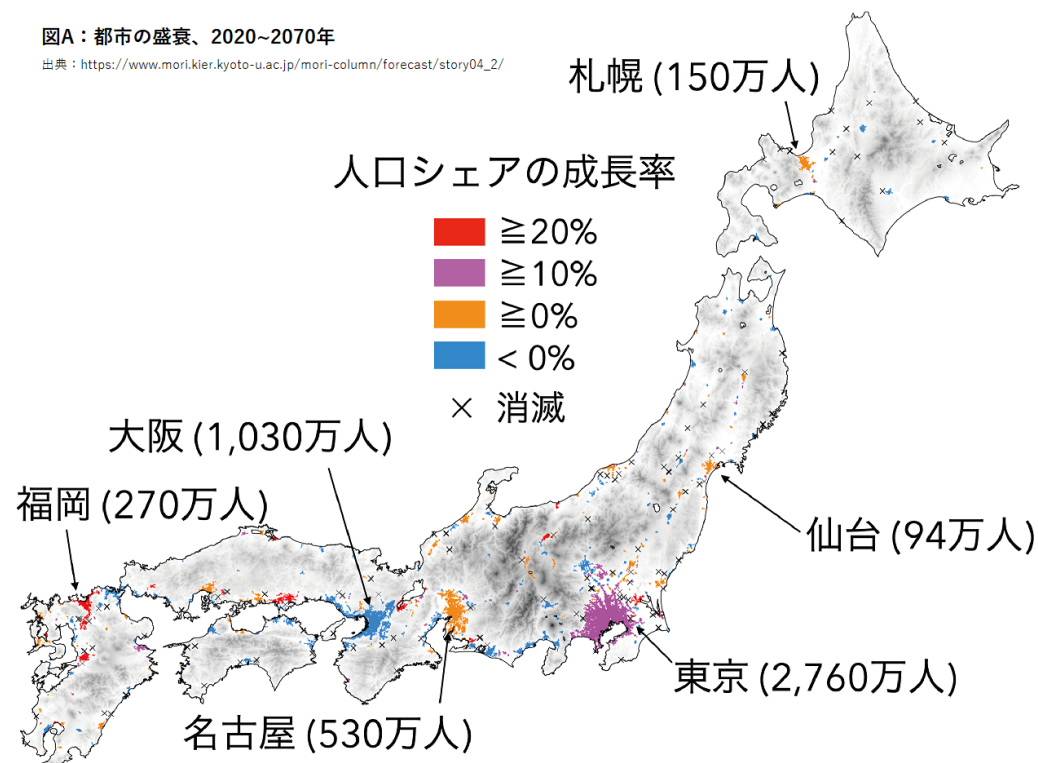


(注1) 「生産年齢人口」は15～64歳の者の人口、「高齢人口」は65歳以上の者の人口
(注2) ()内は若年人口、生産年齢人口、高齢人口がそれぞれ総人口のうち占める割合

(注3) 2005年は、年齢不詳の人口を各歳別に按分して含めている
(注4) 1950～1969、1971年は沖縄を含まない

図A：都市の盛衰、2020～2070年

出典：https://www.mori.kier.kyoto-u.ac.jp/mori-column/forecast/story04_2/

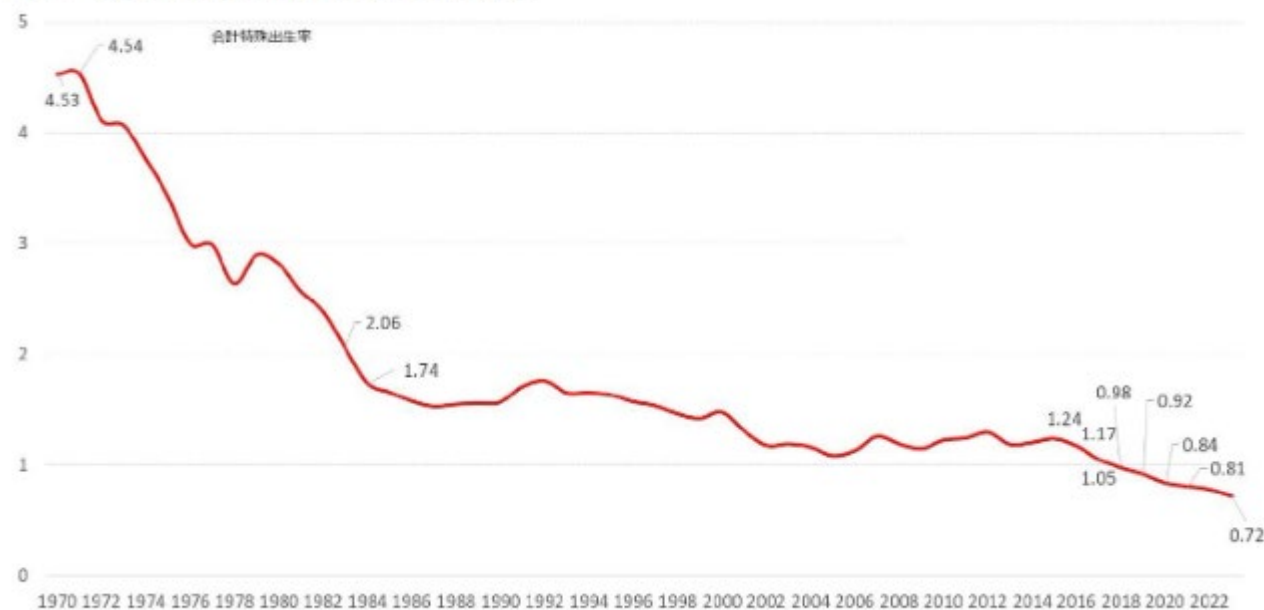


韓国の状況

- ・ 韓国では首都圏への人口集中が進み、2019年には全国の50%を上回った。
- ・ ソウルそのものの人口は減少に転じ、京畿・仁川の人口が増えている。
- ・ 2023年現在、韓国の合計特殊出生率は0.72まで低下している。



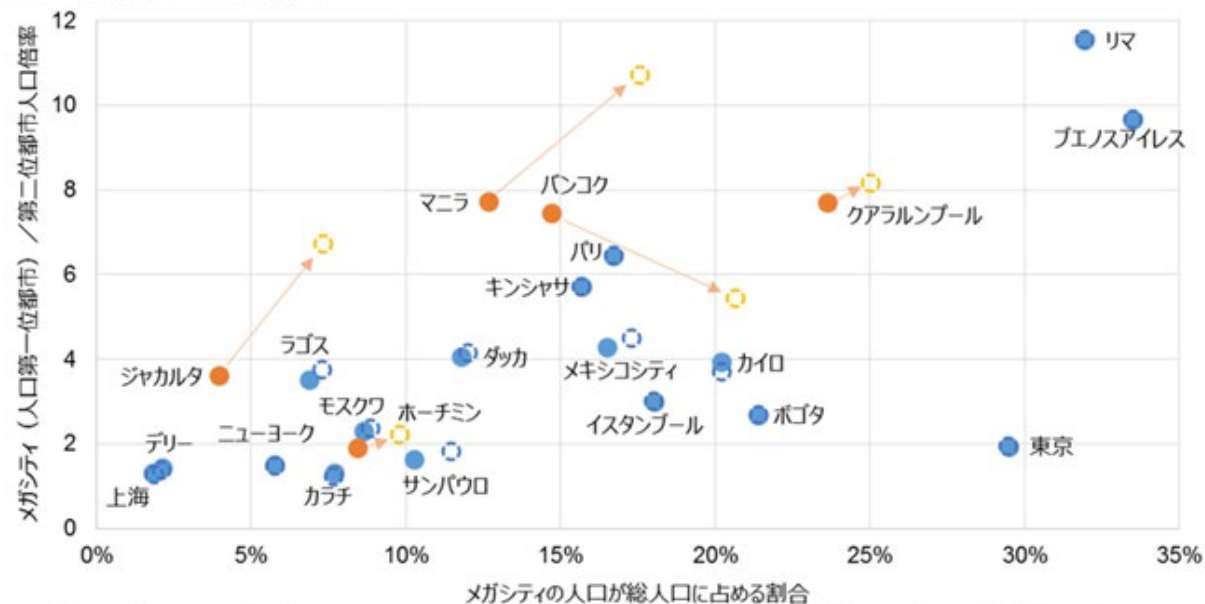
図表 韓国における合計特殊出生率の推移



東アジア諸国の状況

- ・ 周辺国の合計特殊出生率は台湾0.87(2022)、香港0.77(2021)、タイ1.32(2022)。
- ・ 台北都市圏の人口は約700万人、台湾の30%弱を占める。ソウルに似た傾向。
- ・ バンコクの人口は10年で29.3%増加、近郊5都市の人口は35.5%増加。バンコクの合計特殊出生率は0.8、農村では高齢化が進行している。

図表 メガシティと集中度



三井物産戦略研究所『東南アジアのメガシティ、一極集中の進行と近郊への拡大』

注：メガシティがある20カ国とベトナム、マレーシアの人口第一位都市が対象。白抜きは近郊50km圏の都市を加えたケース

出所：国連のデータを基に三井物産戦略研究所作成

都市とは何か？

Goo辞書より：“多数の人口が比較的狭い区域に集中し、その地方の政治・経済・文化の中心となっている地域”

L.マンフォード『都市の文化』より：“コミュニティの権力と文化の集中点”

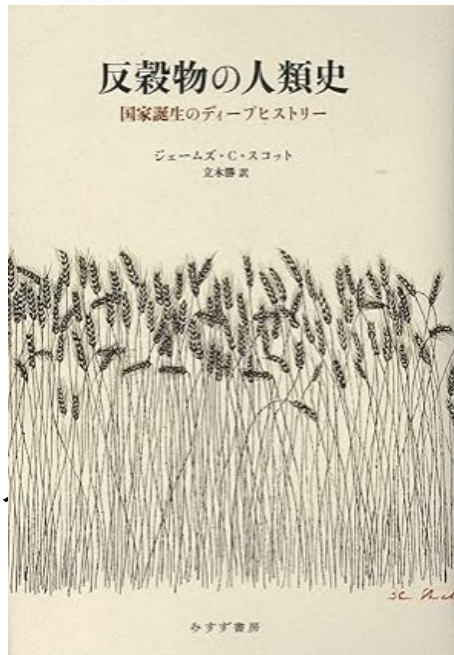


※ポンペイの遺跡

しかし、その都市は永遠不変ではない。

古代メソポタミアにおける都市

- ・ 古代メソポタミアに都市国家群が誕生、収奪・交易・権力の焦点として機能。
- ・ 人口を維持するために人をさらってくる必要があった。
- ・ 人や家畜の集中、交易拡大により伝染病が蔓延。(インフルエンザ、天然痘など)
- ・ 疫病や環境破壊等により衰退・放棄された。永続的とはいいがたい。



※ジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史』

中世晩期～近世の都市

- ・ 中世晩期以降はヨーロッパ諸都市が発展。
- ・ 交易同盟都市や帝国自由都市など、ある程度の自治も。
- ・ 修道院から引き続きテクノロジーを牽引。交易の拡大、ルネサンスの開花。
- ・ 引き続き疫病を招来。(ペストなど)



※ジャン・ファヴィエ『金と香辛料』

近代以降の都市

- ・産業革命以降は労働者が大量に流入。→人口集積が加速。
- ・公害や疫病(コレラ、赤痢など)の発生。→都市インフラ整備へ。
- ・スラムではない、大規模なニュータウンや集合住宅もつくられていく。
- ・町村部では過疎化や少子高齢化が進み、大都市でも出生率低下が顕著。



現代の都市問題

- ・安全で衛生的な都市空間が誕生。
- ・しかし地価は高騰し、庶民が世代再生産するための空間は入手困難。
- ・“賢い現代人”は子育てを始めることを躊躇する。
- ・そもそも現代社会において“賢い現代人”とは何か？
(※歴史的にみても、都市とは人口を増やす場でなく、消費する場では？)



(※台北市の寝転がれない公園ベンチ。これは誰のもので、何のためのもの？)

都市の誕生、精神疾患の誕生

- ・ 精神症状を指す語彙は古代ギリシア時代から存在（例、フレニティス、マニア、メランコリー）したが、異常視されるより、神託などと捉えられた。
- ・ 今日の精神医療・精神科病院のはしりは技術的・思想的先進地域の低地諸国で始まり、欧米諸国に広がっていった。
- ・ 魔女狩りが最も早く収束したのも低地諸国。
- ・ 逸脱者を収容→矯正→生産性への貢献が期待された。



※中井久夫『西欧精神医学背景歴史』

中井久夫 『西欧精神医学背景史』

“ブルジョワ階級が主導権を握った地域では魔女狩りが終息。悪魔憑きもなくなり、道徳的に墮落した者がみられるだけになる。カルヴァニズムに基づくなら、彼らを墮落させないために強制的に労働させなければならない。”

“オランダのシドナム、フランスのピネル、ドイツのクリージンガーといった近代精神医学の父たちは、それぞれの国の市民革命にも関わり、なおかつ穏健派に属していた”

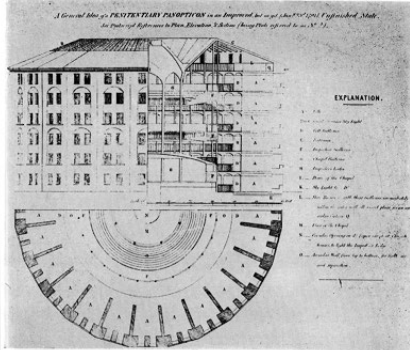
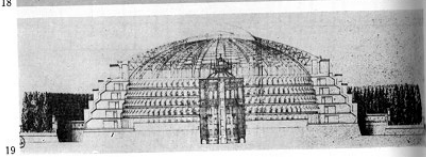
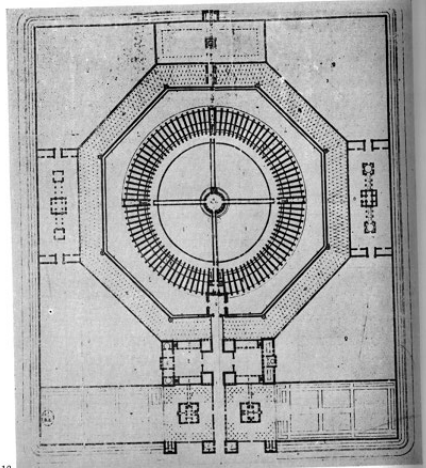
“精神医学・精神医療の推進者たちは、宗教的には新教やユニテリアンだった”



※鎖に繋がれた患者を解放するピネル

19世紀の精神医療

- ・公害の少ない環境が好ましいとする考え方は精神医療にも波及し、精神病院も郊外に移転。“人間動物園”としての精神病院は終焉を迎えた。
- ・新しい社会環境に患者はなじめず、労働の質的变化にも適応できなかった。
- ・退院率がかえって低下し、収容的・閉鎖的性格が高まった。
- ・重症な病院患者の精神医学／軽症な外来患者の開業医精神医学の誕生。

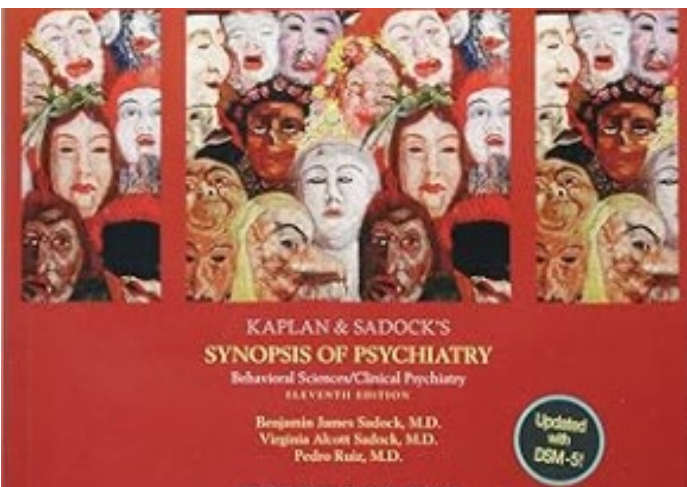


※ベンサムの監獄。フーコー『監獄の誕生』から

17/ J・ベンサム作、一室監視施設の設計図『ジェレミー・ベンサム著作集』
ボーリング版、第四巻、172～173ページ。本文200ページ参照。
18/19/ N・アルーロマン『監獄監獄の計画』(1840)。本文247ページ参照。

収容主義精神医療の終焉（本当に？）

- ・自然科学的精神医学が進展したとはいえ、統合失調症などの根本的解明は進まず、薬物療法などの効果も完全ではなかった。
- ・1960年代の反精神医学運動→アメリカ等で大規模精神病院の閉鎖が進む。
- ・統計学的パラダイムのもと、DSMなどのアメリカ精神医学が躍進。
- ・研究や新薬開発に人やお金が集まった。しかし処遇面では精神障害者たちは窮地に立たされた。
- ・日本は良くも悪くもそうした流れに取り残され、現在に至る。



※『カプラン臨床精神医学テキスト DSM-5診断基準の臨床への展開』表紙

都会と田舎、精神疾患の違い

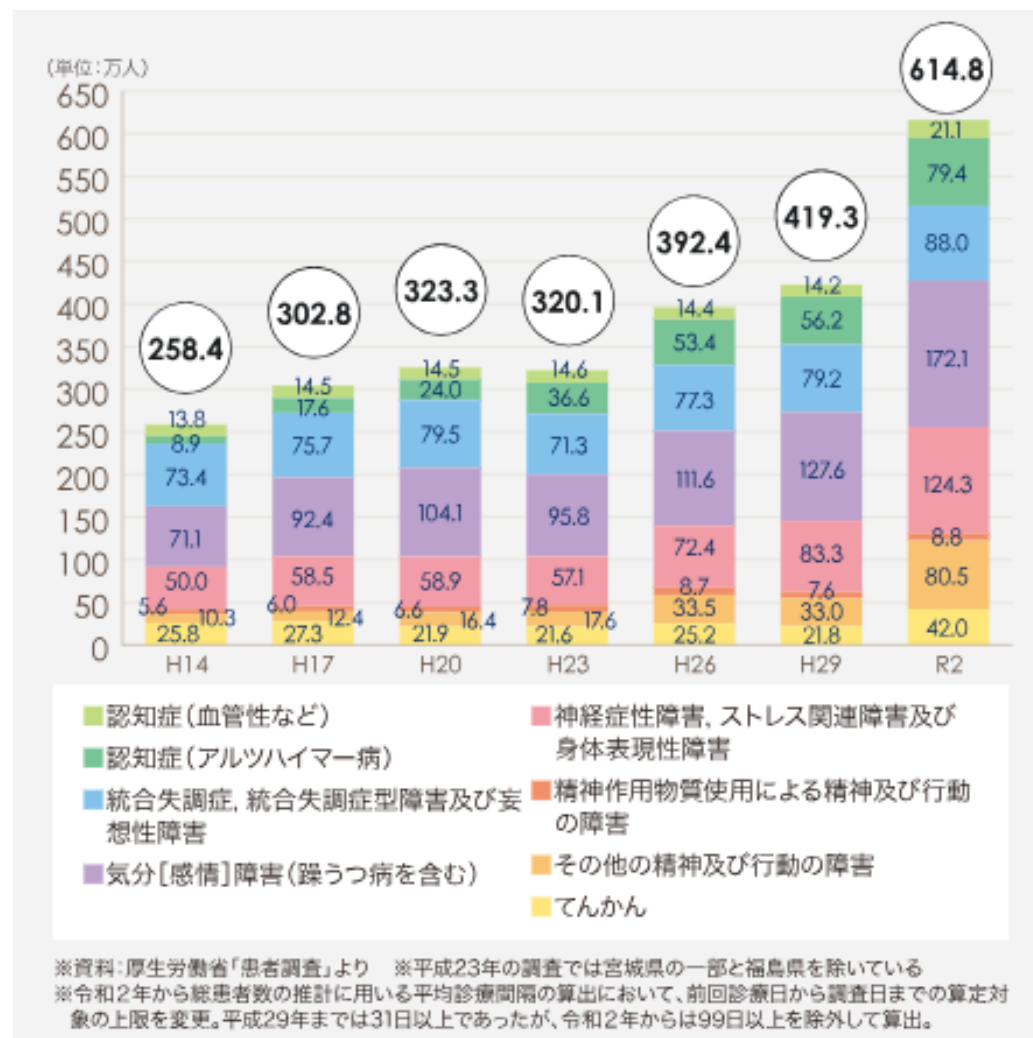
- ・ 途上国と先進国では、先進国のほうがうつ病、不安障害、ADHDの罹患率が高い
(Kessler RC, Ormel J. Petukhova M et al: Development of lifetime comorbidity in the World Health Organization world mental health surveys. Arch Gen Psychiatry. 68(1): 90-100.2011)
- ・ 統合失調症の軽症化と有病率の低下 (須賀英道：統合失調症は軽症化しているか.精神医学59:1019-1027,2017)
- ・ 都市化や移住が統合失調症発症と関連している可能性が示唆される (Van Os, J. and Kapur, S. :Schizophrenia. Lancet, 374, 635-645. 2009)
- ・ 文化症候群としての憑依、摂食障害



※『百怪図巻』より、犬神

精神疾患の増加、読み取りに意識すべき要素

- ・啓蒙活動や疾病教育の進展
- ・精神科クリニックの増加
- ・福祉的介入の増大
- ・薬物療法の進展と普及
- ・疾患概念の変化(例：罹患期間が変わる、より軽症者までうつ病とみなされる、等)



とはいえ、都市は生きづらい！



- ・産業革命以降、同じ作業を繰り返す職種が増加。
 - ・工場、サービス業などで24時間体制の勤務ニーズも出現。
 - ・都市全体も不夜城のようになり、日没とともに休む暮らしは失われた。
 - ・ホワイトカラー層の腰痛や肩こり、テクノストレス症候群。
 - ・都市生活は、高い人口密度や見知らぬ者との共存を前提としている。
- 都市の典型的な生活はホモ・サピエンスにやさしいと言えるのか？

動物としてのホモ・サピエンスの生まれ故郷



- ・ 進化生物学では進化が起こった適応環境をEEA(Environment of evolutionary adaptedness)と呼ぶ。ヒトでは農耕や都市が発達する前の、狩猟採集社会。
- ・ 数十～数百人から成る血縁集団、全員が顔見知り。
- ・ 見知らぬ人間は基本的に敵。処刑や追放の可能性の高い社会状況。
- ・ 作業時間は短く多種多様、文字や数字以外の情報の重要性が高い。
- ・ 自然環境に適応する必要性が高く、感覚の鋭敏さや身体の頑健さも重要。

動物としてのホモ・サピエンスにとっての現代都市



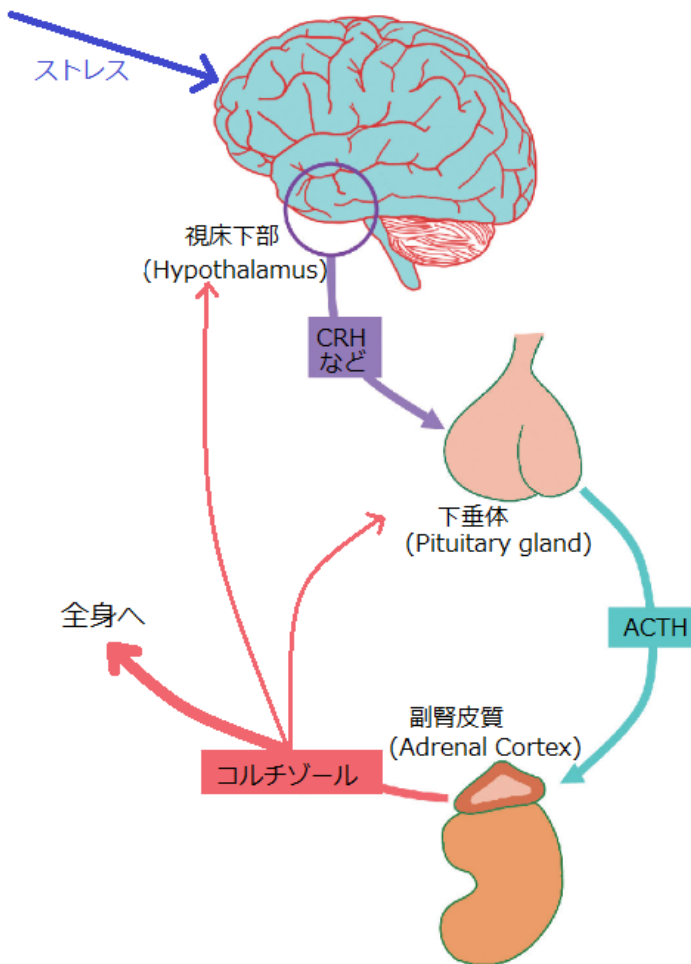
- ・ 数万～数百万人が集まり匿名性が高い。
- ・ 安全性が高い。見知らぬ人間は敵ではない。
- ・ 作業は偏り、長く、しばしば専門的。情報の多くは文字や数字からなる。
- ・ 人工的環境・人工的空間に適応する必要性が高い。
- ・ とりわけ現代の大都市は、諸思想に覆われ尽くした社会空間である。(後述)

都市の生活は大変！（１）



- ・ お互いにとって安全で、法治に基づいた都市空間にfight&flightは不要
- ・ しかし人間には不安や攻撃性に動機づけられる行動制御系が実装されている
→不安や攻撃性を抑圧・抑制できなければ、都市では精神疾患とみなされる
例：パニック症、社交不安症、広場恐怖症

不安や攻撃性を司り、fight&flightを惹起するHPA系



- ・ HPA系(Hypothelamic-Pituitary-Adrenal Axis)は哺乳類のストレス反応系。ホモ・サピエンスや犬や猫は、「自己家畜化」という進化によってHPA系が穏やかになった。
- ・ しかしパニック症や社交不安症の症例では、HPA系の調節異常が多数見つかっている。
 - だがそもそも、戦うか逃げるかする場面の多かった環境では、HPA系が過剰なことより、過小なことのほうが適応上の問題ではなかったか？
 - 野生動物との戦いや、喧嘩・小競り合いの絶えなかった近代以前の社会では、不安や攻撃性は行動の動機付けとして重要だった。

HPA系と自己家畜化、脳内セロトニンと都市生活



- ・自己家畜化、および人為的な品種改良に相当する「家畜化症候群」を呈した哺乳類は、HPA系が穏やかになり、テストステロン(男性ホルモン)も減少し、性差も縮小する。
- ・脳内セロトニン量が増大し、攻撃性や不安が抑制される。すると協力的な性質になる。ストレスへの耐性も高まる。
- ・そうでない野生動物は、集団の密度が高すぎるとパニックを起こしてしまう。
- ・人間は幼児期から協力的。交易や集団生活に適している。
→脳内セロトニンは、人間の集団生活や都市生活を生物学的に支えている。

都市の生活は大変！（２）



- ・ うつ病や不安症にはSSRI(Serotonin Selective Reuptake Inhibitor)が奏功する。
- ・ うつ病の症例にもHPA系の調節異常がしばしば見つかる。
- ・ 現代の都市生活は脳内セロトニンが減少しやすい。

例：不規則な生活、睡眠不足、日光を浴びない生活、ストレス、等々。

都市の生活は大変！ (3)



- ・ 産業構造が変わるたび、新しい課題が出現する。例：IT化、感情労働など
- ・ 19世紀に肉体労働が身体障害者を、20世紀に知的労働が知的障害者を析出させた。
(今日では境界知能までもが論議の対象になろうとしている)
- ・ 21世紀における職場のホワイト化、高コンプライアンス化は、何を析出させようとしているのか？

発達障害は、“現代都市生活障害”でもある

- ・ SLD(specific learning disorder、限局性学習症)は読み書き算盤の、
- ・ ASD(Autism Spectrum Disorder、自閉スペクトラム症)はコミュニケーションの、
- ・ ADHD(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder、注意欠如多動症)は集中力や落ち着きを要する作業の障害として析出。
- ・ これらは神経発達症群と呼ばれる。ニューロダイバーシティの観点で見れば、セロトニンの不足しやすい特性や、HPA系の亢進しやすい特性も先天的な神経発達の 이슈。いずれも現代都市でこそ生きづらい特性。

→そもそもニューロダイバーシティという問題系が立ち上がってくること自体、都市生活のルールや要求水準の高さを示唆している。

人口密度と哺乳類（人間も無関係ではない）

・ R.M.ダンバー (Dunbar, R.I.M. & Shultz, S. . The infertility trap: the fertility costs of group-living in mammalian social evolution. *Frontiers in Ecology and Evolution* 2021 9: 634664.)

“哺乳類は集団生活することで安全等の恩恵を得る。しかし他者との利害関係の調整などで認知コストを要するため、形成可能な集団規模には限界がある”
“常態としての群れは、たいていの哺乳類で2～15頭、霊長類は数十頭も”
“餌を集めるためのコストがネックになる点を別にしても、人口密度は雌（女性）の妊孕性と負の相関にある”

・ R.アマンダ (Amanda Rotella, Michael E. W. Varnum, Oliver Sng, Igor Grossmann. Increasing population densities predict decreasing fertility rates over time: A 174-nation investigation. *Am Psychol.* 2021 Sep;76(6):933-946.)

“諸変数を調整して比較してもなお、(人間の)人口密度と出生力には関連性がみられる。安全でない環境・宗教・社会規範次第では出生力低下は緩和される”

ここまでをまとめると

- ・現代人のメンタルヘルスの析出、ひいては精神医療の発展は都市という空間の成立・発展と密接な関連を持つ。
- ・自己家畜化という生物学的進化によって増加した脳内セロトニンのおかげで、人間は都市生活やグローバル交易網を実現した。しかし脳内セロトニンの多寡には個人差がある。密集し、不夜城で、勤勉な都市生活はなかなか大変。
- ・人間の精神機能には個人差があったが、近年は、そうした個人差が発達障害のようなかたちで析出するようになり、新しい生きづらさを成している。
- ・密度が過剰な環境は妊孕性を低下させる。人間も例外ではなさそう。

社会科学の観点から現代都市空間と人間を見る

- ・ L.マンフォードは都市を“コミュニティの権力と文化の集中点”と呼んだ。
 - ・ 都市の空間、都市の生活は新しい思想や文化を生み出す。
 - ・ と同時に、その新しい思想や文化がさらに新しい都市空間を創出する。
 - ・ 新しい思想や文化や都市が新しい人間を創出し、さらに新しい都市をも生む。
 - ・ そうして思想と文化、都市、そして人は循環的に刷新されていく。
- 都市環境は変化し続けている。その影響下で私たちは暮らしている。

模式図：都市の発展が思想をつくり、思想がまた街をつくる

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神

マックス・ヴェーバー著

大塚久雄訳



富利の追求を厭煩するピューリタニズムの経済倫理が実は近代資本主義の生誕に大きく貢献したのだという歴史の通説を究明した画期的な論考。マックス・ヴェーバー(1864 - 1920)が生涯を賭けた広大な比較宗教社会学的研究の出発点を圖す。旧版を全面改訂して一層読みやすく理解しやすくするとともに懇切な解説を付した。

プロテスタント、個人主義の誕生



近世都市と商人階級の発展



近代家族の形成

エドワード・ショーター 著

田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道 潤 訳



プライベートな家屋の浸透、核家族の誕生、子ども第一主義

性の歴史 I

Histoire de la sexualité

知への意志

La volonté de savoir

ミシェル・フーコー

MICHEL FOUCAULT

渡辺守章 訳

功利主義、生権力の発展



ジェントリフィケートされた都市空間

都市で育まれた近代思想(1)

- ・今日の資本主義はヨーロッパで発展。簿記、利子、保険、株式会社等々が発展し、封建制度の外側の商人階級(ブルジョワ階級)が台頭する。 ユルゲン・コッカ『資本主義の歴史』
 - ・彼らが好んだのはプロテスタントやカルヴァン派。勤勉に働くことが宗教的に正当化された。聖書を個人単位で読む習慣も生まれる。 ヴェーバー『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』
 - ・ブルジョワ階級は、子どもを大切にし性別分業化の進んだ近代家族を生む。と同時に、家屋はプライベート化していく。 アリエス『<子供>の誕生』
 - ・その資本主義に根差した私有財産制度や自由貿易を支える概念として社会契約論が支持され、法治も推進される。 ロック『市民政府論』、ルソー『社会契約論』など
 - ・社会契約からは今日の主権国家、ひいては民主主義や国民国家までもが導かれた。フランス革命やアメリカ独立戦争にも影響。
- 今日の西洋思想体系、ひいては倫理学や政治学の基礎は都市にルーツを持つ。

都市で育まれた近代思想(2)

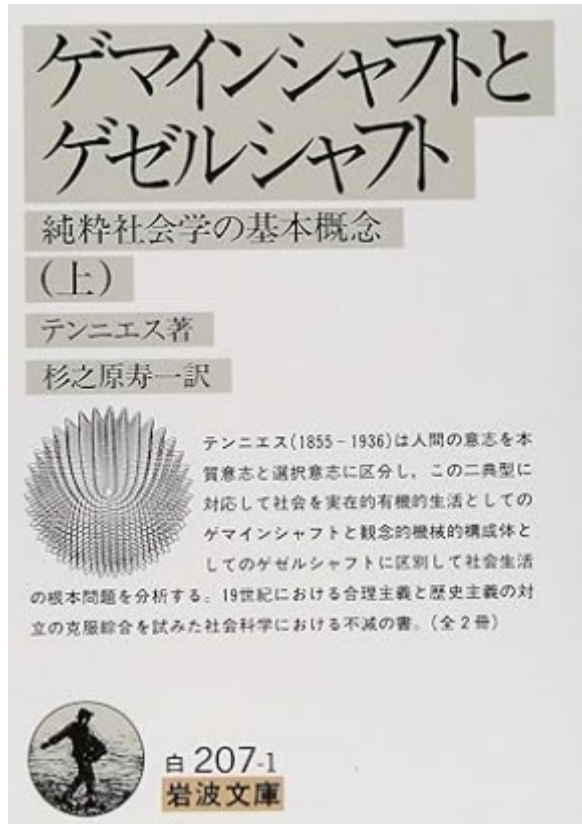
- ・これらは相互依存しながら発展し、タイムラグを含みつつ庶民へと浸透。
- ・資本主義は、勤勉、(自己)投資、費用対効果、リスク管理の考え方と親和性が高い。資本主義を内面化した個人はこれらに基づき行動する。
- ・社会契約は、法に基づく平等、私闘の禁止、私有財産の保護、弱者の保護、安全な社会秩序と関連する。ここから功利主義の思想も発展。
- ・身分や家柄や土地から個人は解放され、職業選択の自由や転居の自由が生まれた。他方でマルクスのいう労働者（と資本家）という新しい階級が誕生。

→今日では当たり前だが、フランス革命以前、これらは当たり前ではない。

→20世紀の先進国では、これらの恩恵が労働者にまで行き渡った。

→テンニースでいう“ゲゼルシャフト”化、“脱ゲマインシャフト化”。

テンニース『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』



・ゲマインシャフト：自然に人が集まった共同体。血縁や感情や地域によって結びつき、ローカルな権力がまかり通る。共同体主義的で実在的。

・ゲゼルシャフト：近世以後の、目的意識に根ざした共同社会。利益や目的に基づいた社会関係。法治や社会契約や資本主義・個人主義に親和的で、観念的。

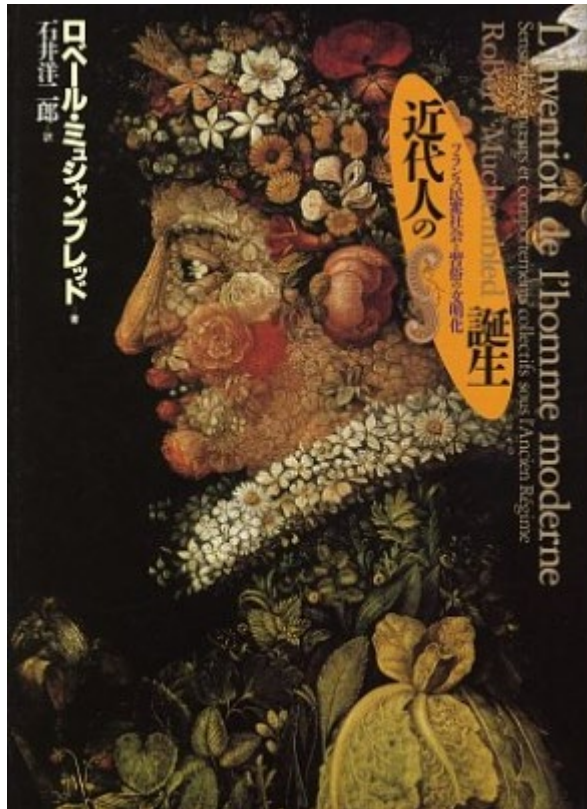
- ・ゲマインシャフトの例：狩猟採集社会、農村、血縁大家族、田舎の居酒屋
- ・ゲゼルシャフトの例：大都市、近代国家、官僚組織、全国チェーンの居酒屋



※ゲマインシャフトの残る空間：長野県姨捨の村落、北海道根室のスナック

※ゲゼルシャフト的空間：東京四谷の街並み、池袋繁華街

“ゲゼルシャフト化”への大衆の抵抗



・ヨーロッパ諸国では、こうした思想的進展が数世紀にわたってゆっくりと進んだ。

・しかし被支配階級はそれらの内面化に抵抗を示す一面もあり、生活習慣や考え方、家屋や家族のありかたは速やかには変わらなかった。

→支配階級と被支配階級にはタイムラグがある

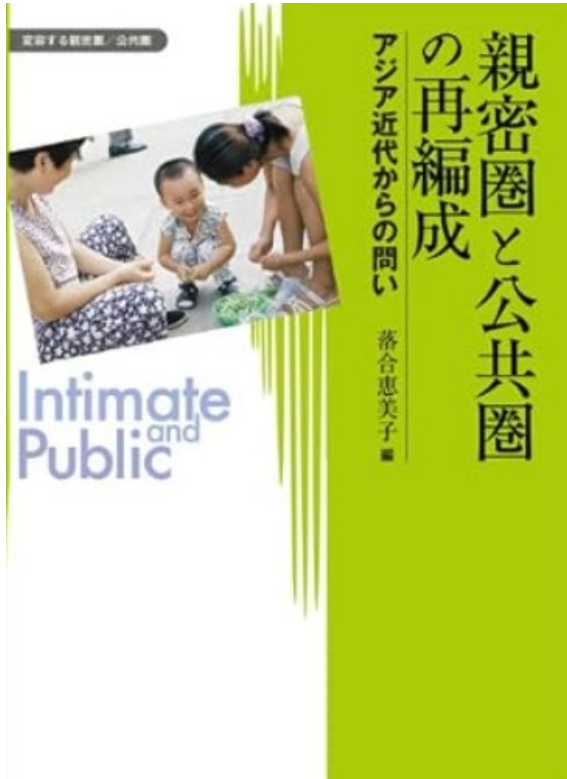
(ロベール・ミュシャンプレッド『近代人の誕生 フランス民衆社会と習俗の文明化』)

※東アジア諸国にタイムラグはあったか？

→特に戦前の日本にはあったかもしれない。だが、韓国や中国ではどうだっただろうか？

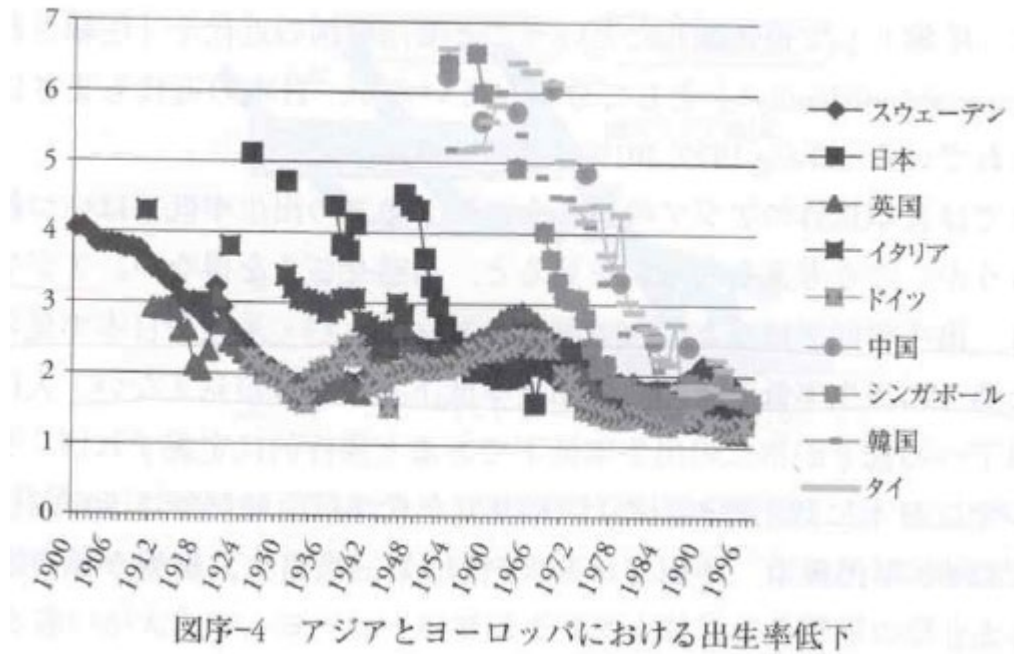
※実際、コロナ禍において、欧米と東アジア諸国の庶民の振る舞いはかなり異なっていた。

落合恵美子編 『親密圏と公共圏の再編成』



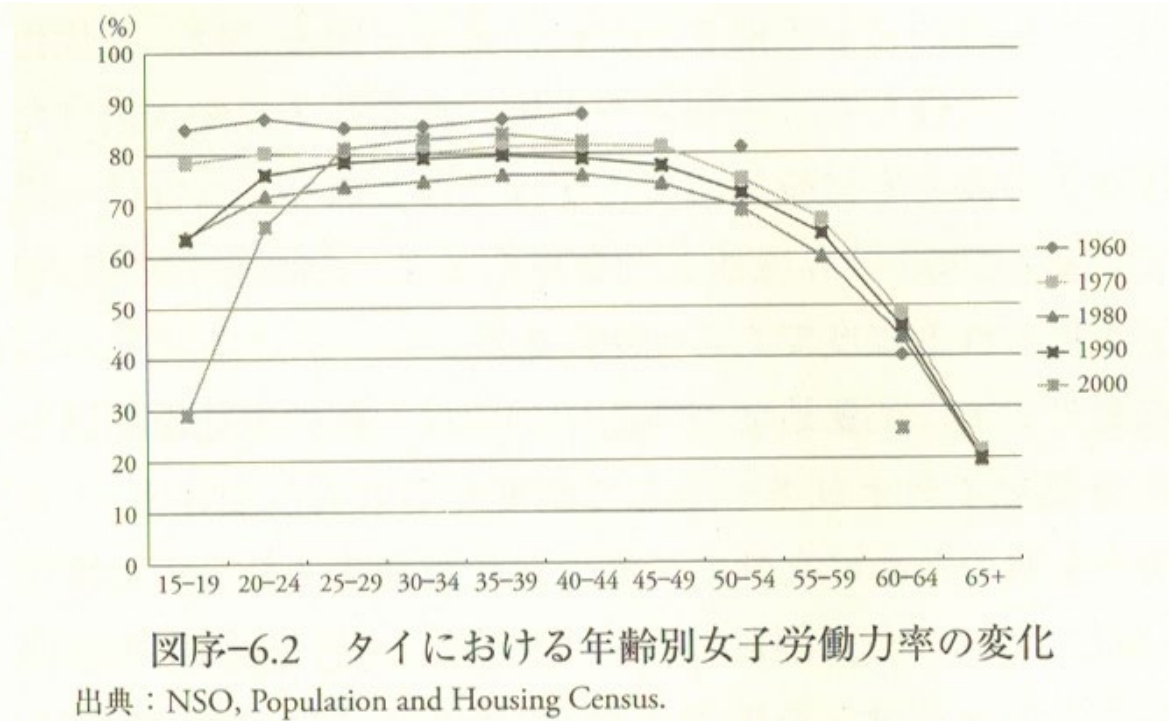
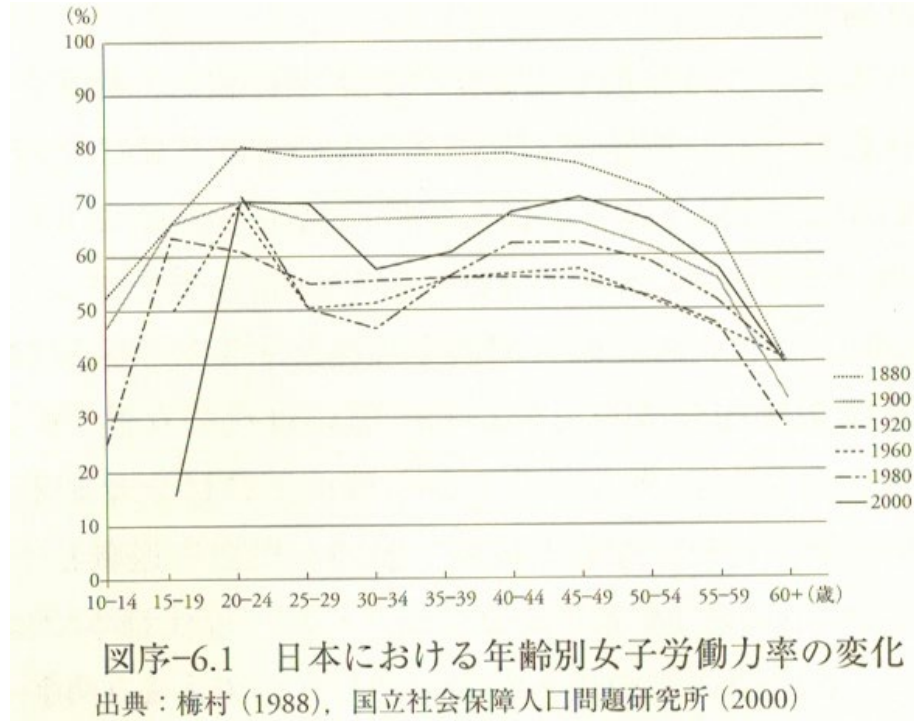
- ・近代化と少子化には二つの段階がある、とみる。二つの段階の間に「黄金の近代」がある。
 - ・労働者が恩恵を享受する「黄金の近代」は、欧米では50年、日本では25年、東アジア各国では0年。
 - ・ハードウェア面の近代化は急速で一律。しかし思想や慣習の近代化には“むら”がある。その“むら”を東アジアの少子化と関連づけて論じている。
 - ・「個人主義なき個人化」：経済合理性やリスク回避的個人主義は内面化したか、家族観や婚姻観では変化が追いつかず、若者が板挟みになった状態。
- 韓国は出生率が低下しただけでなく自殺が増加した。

『親密圏と公共圏の再編成』から(1)



- ・ 出生率低下は二段階に進む。第一段階は、子ども中心の近代家族化が浸透した時。
- ・ 第二段階は、ジェンダー分業の解消、脱主婦化。
- ・ 第一段階と第二段階の間に出生率の安定した時期があり、近代化の早い国々ではそれが長く、日本は短め、東アジア諸国はほとんどゼロ……というのが落合らの指摘。

『親密圏と公共圏の再編成』 から(2)



- ・主婦化と脱主婦化は女子労働力率の「M字カーブ」に示される。
- ・日本、特に東京の女子労働力率は、近代化に伴って一時的に低下した。
- ・しかしタイではM字カーブはみられず、第一・第二の出生率低下の間も無かった。
- ・熊代は、第二の出生率低下を「女性の資本主義への内部化」ともみている。

韓国と台湾にみる「個人主義なき個人化」



- ・『82年生まれ、キム・ジヨン』では個人主義と古い家族観の葛藤が記される。
- ・『パラサイト』では新旧の家族観と格差、旧態依然とした身体性が描かれる。
- ・東アジア諸国は子ども第一主義と新自由主義的競争が重なり、受験戦争は激化。
- ・宗教的にはまったくプロテスタント的ではない。儒教道教が依然現役。

→子ども第一主義やプライバシーの面では個人主義が浸透した。資本主義や社会契約も浸透した。だが家族観はそこまで素早く変わらない。

資本主義、個人主義、社会契約が徹底したら

- ・資本主義はあまりにも当たり前になりすぎて、内面化されすぎてしまい、行動原理や超自我として個人を束縛するようになった。
- ・自己目的化した資本は、ゲマインシャフトの領域にあった諸々まで“ゲゼルシャフト化”し、自己増殖を続けている。(例：就活、葬儀、男女の出会い等)
- ・労働者の暮らしは悪化。貧富の格差が拡大。
- ・個人主義は大家族を核家族化させ、さらに個人化させたが、それだけでは人は配偶しないし子育ても始められない。(アンソニー・ギデンズは、親密性の変化により欧米はこれを超克したと述べる。だが、東アジアはそうではない)
- ・社会契約や法治主義も、徹底させれば社会の隙間がなくなり、些細な逸脱も無視できなくなる。(例：コンプライアンスを遵守するホワイトな職場では、従業員自身がまずホワイトらたねばならない)

思想空間としての現代都市



- ・例えば東京では、資本主義や社会契約や個人主義に該当しない空間は少ない。
 - ・思想空間としての東京に暮らしていながら、そのことに疑問を持つのは難しい。
 - ・それでいて、落合らが論じたように家族観はすぐには変わらない。
- 都市に集まりゲゼルシャフト化した人々は、子どもをつくらない。遺伝子の増殖よりも資本の増殖を良しとする。
- 世代再生産を資本主義に内部化するのも、ひとつの方法かもしれないが、その是非は価値判断の領域に属する。

まとめ

- ・都市と少子化に関連した、生物学～精神医学的な課題と、人文社会科学的な課題について紹介した。
- ・ホモ・サピエンスは、高い認知リソース、自己家畜化に伴うHPA系の穏健化と脳内セロトニンの増大によって、人口密度の高い都市生活やグローバルな交易を可能とした。
- ・都市生活はストレスたり得るし、その密度は世代再生産にも影響する。HPA系や脳内セロトニンの特性次第では精神疾患たり得る。また、今日の都市生活や都市空間に適応しづらい人が発達障害として析出するようにもなっている。
- ・現代の生きづらさは、社会科学的要素(思想、文化、慣習、法など)によっても左右される。資本主義、社会契約、個人主義などは都市空間をなすだけでなく、それ自体、配偶や拳児も含めた人間の行動を左右する要素である。
- ・都市はそうした思想が具現化した空間。そうした思想を個人に内面化させ、再生産する場としても機能している。その影響から逃れるのは簡単ではない。

熊代が考える各分野の課題

- ・哺乳類の世代再生産技術はどこまで進展可能か？ 遺伝子編集、子宮外胎児培養技術など

※医学生物学上の課題に加えて、倫理的・価値判断的にも大きな課題を含む。

- ・現代の都市環境にあわせるかたちで人間の行動科学的／精神医学的問題はどこまで解決可能か？

※現代都市環境にヒトを適合させすぎるのは、倫理的な問題であるだけでなくヒトの多様性に差し障るのではないか。ニューロダイバーシティの題目は、それ自体は正当であるよう思われる。

- ・思想や空間が世代再生産やホモ・サピエンスの未来に与える影響の再検討。

※都市空間そのものがどういった思想に立脚し、これから何を生むのか。

※世代再生産を資本主義等に内部化して良いのかどうか。

※欧米諸国は少子化が急峻ではないため、こうした問題にメスを入れたがらないか、ひょっとしたら東アジアでの独自の進展に難癖をつけるかもしれない。

熊代自身の願い

- ・人間は、そもそも大型哺乳類である。その人間が思想や空間にどこまで疎外されているのか、人間にやさしい未来を考える際には顧慮していただきたい。
 - ・とはいえ、「ゲマインシャフトに帰れ」と主張するのはナンセンスである。
 - ・諸思想の恩恵は否定すべきではなく、技術的進歩や人権の擁護といった観点からも手放すべきとは思えない。
- “過ぎたるは猶及ばざるが如し”の精神で、妥結と調和を導いていただきたい。
- さまざまな領域の方に、こうした問題への関心を持っていただきたく思います。
- 専門家の皆さん、これから専門家になっていく学生さん、どうか少子化や人間や動物としてのホモ・サピエンスにも関心をお寄せください！



ご清聴ありがとうございました